

《フォーラム》歴史の交差路—現代・古代・表象

映／写し出されたローマ帝国

佐 野 光 宜

はじめに*

先頃、*Star Wars Episode III: Revenge of the Sith*が公開された。ご覧になった方はお分りのことと思うが、このエピソードでは、共和政から帝政への移行が1つのテーマとして立ち現われていた。もちろん、それはG. Lucasが、この一連の物語のモデルとして古代ローマを用いていたことを示している。この映画に限らず、ローマを1つのモチーフとして描かれた映画は少なくない。その一方で、近年だけでも*Gladiator* (2000)、*Augustus: the First Emperor* (2003)、*The Passion of the Christ* (2004)とローマ世界が直接描かれた映画もコンスタントに制作されている。実際、私たちが、ふと、ローマ世界のイメージを思い描いたときに、それが*Spartacus* (1960)や*Ben-Hur* (1925,1959)のワン・シーンであったということは多いのではないだろうか。研究者の側ですらそうなのであるから、一般の人々にとって、映画がローマ世界のイメージに与える影響は相当に大きいものと思われる。

また、逆に、現代の映画制作者たちが、ローマ世界をどのようなものと考えているか、自分たちの描きたいと思ったテーマとどのようにローマ世界が関わっているのかを読み取ることも興味深い。そこには、作り手の意識的・無意識的な歪曲が潜んでいる可能性がある。ただし、それ自体は良い悪いという価値判断がなされるべきものではないだろう。むしろ、そこにおいて何が作り変えられているか、あるいは、いないのか、を見るべきである。その視点から、それが作られた時代や社会、作り手の意識を知ることにつながるはずであるから。つまり、映画という表象において、古代と現代がどのように交わっているのか、そこには、古代史研究者が考察すべき問題の1つが横たわっているように感じられるのである。映画、芝居、TVドラマ、カジノといったポピュラーカルチャーを素材に、このような問題設定を实践したものが、ここで取り上げるS. R. Joshel らによる論文集、*Imperial Projections: Ancient Rome in Modern Popular Culture* (2001)である。研究の対象とする時代と現代との往復は、歴史研究において不可欠のことであり、それを試みる方法のひとつとして考えても、非常に有益な論著と言えよう。ここでは、本書の紹介を中心としつつ、映画という表象とローマとの関わりについて、あるいは、広く古代世界と現代世

界の関わりについて思うところを記していきたい。

1. ポピュラーカルチャーと古代ローマ

本節で紹介するのは、先ほども述べたとおり、S. R. Joshelらによる論文集、*Imperial Projections: Ancient Rome in Modern Popular Culture* (Baltimore & London: The Johns Hopkins University Press, 2001, Pp. viii + 299.) である。始めに本書の構成を述べておこう。

Introduction (S.R. Joshel, Margaret Malamud & M. Wyke)

Ch.1 Oppositions, Anxieties, and Ambiguities in the Toga Movie (W. Fitzgerald)

Ch.2 The Roman Empire in American Cinema after 1945 (M.M. Winkler)

Ch.3 Seeing Red: Spartacus as Domestic Economist (A. Futrell)

Ch.4 *I, Claudius*: Projection and Imperial Soap Opera (S.R. Joshel)

Ch.5 “Infamy! Infamy! They’ve All Got It in for Me!”: *Carry On Cleo* and the British Camp Comedies of Ancient Rome (N.J. Cull)

Ch.6 Brooklyn-on-the-Tiber: Roman Comedy on Broadway and in Film (Margaret Malamud)

Ch.7 Serial Romans (Martha Malamud)

Ch.8 Shared Sexualities: Roman Soldiers, Derek Jarman’s *Sebastiane*, and British Homosexuality (M. Wyke)

Ch.9 Living like Romans in Las Vegas: The Roman World at Caesars Palace (Margaret Malamud & D.T. McGuire, Jr.)

+ Bibliography, Filmography and Index

各論文の執筆者は、歴史学、西洋古典学を専門とする者だけではなく、映画とそこにあらわれる政治性の関係を研究する者なども含まれる。概して、各自のこれまでの研究のなかで、古典古代が現代にいたるまでどのように捉えられてきたかということに関心を持っている研究者が多い。そのような研究者たちが、映画や演劇、TVドラマなどといったものを素材に、「現代の大衆文化にとって、ローマのイメージが持つ有用性と可変性を考察 (p. 2)」した諸論文を一書にまとめたものが、本書である。非常に広範な内容を含むテーマであり、自ずと一書では限界があろう。Introductionでも断られているように、本書では、アメリカとイギリスにその舞台が限られ、時代的にも1950年代と60年代が中心となっている。本書の成り立ちは、何か特定のシンポジウム等がきっかけになっているわけではないようだが、事前に各執筆者同士で十分なコミュニケーションがとられたであろうことは、各論文中で関連する論文への言及が見られることから察せられる。また、統一された形でのビブリオグラフィと丁寧なフィルモグラフィは、利用するものにとって非常に便利である。

では、Introductionから順番に、内容を簡単に紹介していこう。ただし、映画とローマとの関わりがここでの関心の中心であるので、映画を素材とした第1、第2、第8論文は後段でやや詳しく紹介したい。

まず、Introductionでは、本書のねらいが述べられた後、1950年代から60年代アメリカの大衆文化においてローマがいかに表象されてきたかを大枠で解説する。それによると、大きく言って3つの軸があるという。①キリスト教徒（＝アメリカと重ね合わされる）によって打ち倒される圧制的な帝国、ローマ（＝イギリスと重ね合わされる）という姿。②特に共和政期のローマが、現代の法に対する考え方、あるいは民主主義の先駆的存在（！）として、アメリカそのものであるかのように描かれる。③肯定的にも否定的にも、奢侈によって特徴付けられるローマの姿。否定的な側面とはもちろん、性的放縦と度が過ぎた贅沢な暮らしによってモラルの退廃へといたる、お決まりのイメージである。このように、ローマとの距離は、さまざまであったが、いずれにせよ、アメリカにとってローマという存在は、移り変わるジェンダーの役割や性的なアイデンティティへの不安・懸念を映す場、イギリスの植民地であったアメリカあるいは新たな帝国としてのアメリカの役割・立場を重ね合わせてみる場となっていたと、捉えられている。

第3論文は、スパルタクスの反乱に対する見方の変遷を追う。時代に応じて、生まれながらにしての平等という観念、ナショナリズム、あるいは社会主義の喧伝手段となってきた。H. Fastによる原作のマルクス主義的色合いを作り変えた映画版では、政治的革命ではなく家庭的な情愛がストーリーの中心をなした。また、主人公である男性が、敵役に対する当然の優位性を持つことが、女性という存在によって保証されているということ、そして、それがどのように利用されているのか、ということに対する洞察もある。

第4論文は、R. Gravesの小説*I, Claudius* (1934) をもとにしたBBC制作のTVドラマが素材である。このTVドラマでは、その他の映画とは対比的に、ローマ帝国のあらゆる側面が、皇帝家の出来事という舞台上に凝縮されている。その結果、ローマ帝国の衰退は、ファミリー・ドラマとなるのである。そして、この舞台で真の脅威となるのが、裏で操る、欲深い、好色な女性たち。こういった女性たち（特にリウィア）を、このドラマでは帝国という支配体制を支持する側として描く。他方、善良な男たちは、共和政を復活させたいという意に反して、帝国を受け入れることを強制させられるのである。このドラマがアメリカで放送されると、批評家たちの言動もあって、ローマ人は自分たちではなくイギリス人であるという見方が、一般民衆の間に形作られていったという。

第5論文は、古代ローマを素材にしたイギリスの軍隊生活コメディcamp comediesを分析し、こういったジャンルのルーツを探る。とりわけ目を引くのが、このような軍隊生活という場が、60年代の性や性行動・現象に対する不安や懸念を映すために使われる、その使われ方である。そこに見られるセクシュアリティの描かれ方は、60年代という時代状況を色濃く反映したものであった。

第6論文は、ブロードウェイと映画におけるローマ喜劇が題材である。ユダヤ人喜劇作家（あるいは、役者）によって翻案されるプラウトゥス作品では、賢い奴隷という喜劇の伝統がユダヤ系アメリカ人にとってのアイデンティフィケーションと、みずから重ね合わせるべき対象を探るための舞台となる。その一方、映画では、それとは違った様相をみせる。R. Lesterは、ハリウッドの映画産業と、社会的に不公平であると彼の目に映ったローマ世界との双方を、自身の映画の中で批判しようと考えたのである。しかしながら、映画産業に対する批判は、プロデューサーらによるストップがかかる。その結果完成した映画は、痛烈なリアリズムでローマを描きながら、ジョークやユーモアがそれにのりという、奇妙なものになってしまったのである。

第7論文は、古代ローマを舞台にしたC. McCulloughの一連の小説についてである。まず、この小説からは、例えば、血筋が社会階級を決め、女性は弱く従属的、同性愛は墮落の証、東方とは、女々しく贅沢好み、といった保守的な性格が看取される。この他、この小説の販促活動や、ローマの歴史をいかに恋愛小説へと組み立てているかについても分析が加えられる。

第9論文は、ラスベガスのシーザーズ・パレスというカジノの歴史と建築についての考察である。奢侈と権力の象徴としてのローマというイメージが、50年代、60年代のアメリカ人たちにある程度受け入れられていく姿が浮かび上がる。

以上、本書の内容を簡単に紹介してきた。少なくとも、各論文が大衆文化に映されたローマの姿を通して、50年代から60年代の、特にアメリカ社会の諸側面を浮かび上がらせようとしている、ということをご理解いただけたのではないだろうか。ここからは、映画を中心として議論を行った3つの論文についてやや詳しく紹介し、若干のコメントを付したい。

2. 映／写し出されたローマ帝国

ここでは、第1、第2、第8論文を取り上げるわけであるが、特に興味深く読んだ第2論文を中心に紹介するために、まずは第1、第8論文を紹介しよう。

トガ・ムービーが素材となっている第1論文では、キリスト教によって打ち倒されることを運命付けられた、専制的な帝国としてのローマという常套的な表現が丹念にあとづけられる。*Quo Vadis* (1951) や *Ben-Hur* に代表される50年代の映画では、用心深くキリスト教が擁護されているという。つまり、キリスト教が体制破壊的であることを示さずに、擁護するのである。では、どのようにして体制破壊的な側面を隠すことに成功したのであるうか。それはすなわち、親と子、夫婦といった家庭的な情愛や、あるいは、恋愛に起因する動機が、帝国を打ち倒すための第一のものとして描かれることで、結果、キリスト教徒が帝国側に勝利したとしても、それはキリスト教が体制破壊的ということとは結びつかない。

いことになるのである。アメリカ人によって演じられる主人公の男性は、キリスト教徒の女性（ヨーロッパ人によって演じられる）と恋に落ちたのちに、その考え方を改める。粗野な主人公は、ローマでの墮落した政治世界から切り離される、と同時に、キリスト教によって教化される。そのような筋立てが、この時代の映画から看取されるのである。その一方で、感情的な駆動力としての男性のエロティックな関係を、これらの映画がどう見せているかについても論じている。

D. Jarmanの*Sebastiane*（1976）を取り上げるのは、第8論文である。これまでいかに聖セバスティアヌスが表象されてきたかをあとづけ、彼の苦しみが、エロティックで特に男性同性愛の経験・喜びの典型と見なされるようになる過程を検討している。*Sebastiane*に描かれた聖セバスティアヌス像を、セバスティアヌス像の表象が変遷してきた流れと、50年代と60年代の男性同性愛のポルノ映画との双方に関連付けて考察することによって明らかにされたことは、*Sebastiane*において、ローマが同性愛解放の比喩になっているということである。そこにおいては、同性愛は、もはや、墮落の証ではない。また、他のほとんどの映画では皇帝を中心とした、いわば、宮廷が舞台の中心の1つとなるが、*Sebastiane*では、帝国周縁における兵士たちのバラックでの生活に焦点があてられる。さらに、M. Foucault以後のホモセクシャル・アイデンティティ理解の視点から、自己犠牲という潜在的でエロティックな快楽を考察していくことで、この論文は締めくくられる。

50年代のアメリカ映画と同時代の政治との関連について考察したのが、第2論文である。これらのアメリカ映画の中で、どのように帝政期ローマは表象されてきたのだろうか。簡潔に言って、それは権力と悪徳、モラルの退廃によって彩られる世界であった。権力については、*Spartacus*での奴隷アントニヌスに向けたクラッススの次の言葉が端的に言い表している。「見てみよ、これがローマだ。ローマの力、威厳、恐ろしさがあるだろう。巨人のごとく、知られる限りの世界を牛耳る力だ。ローマに逆らうことのできる人間などおらん。どんな民族だってそうだ。お前など言うに及ばんだろう…ローマとうまくやっていくには、たった1つの道しかないぞ、アントニヌスよ。ローマに仕え、膝を屈し、足下にひれ伏し、そして、ローマを愛さなければならん。そうではないか、アントニヌスよ¹⁾。」また、悪徳・モラルの退廃については、*Ben-Hur*（1959版）でメッサラが死んだのちに主人公がポンティウス・ピラトゥスに向けて彼のことを話した、その言葉である。「それらはみな、メッサラのやったことではない。私は、彼のことをよく知っていた。ローマの残酷さが彼の体に行き渡るまでのことだが、な。ローマがメッサラを墮落させたのだ²⁾。」そして、そのように表象されるローマに抗う主人公たちが求めて闘うものは、極めてアメリカ的な価値観に類似したものであり、その過程はアメリカ自身の歴史をなぞるものであるのだ。すなわち、抑圧者からの政治的自立であり、また精神的自由の獲得なのである。

ハリウッドでは、無声映画の時代から、同時代の軍国主義的・全体主義的な帝国を、上述したような帝政ローマの姿の平行とみなしてきたという。しかし、第2次世界大戦

の後、そのベクトルは、まったく逆となり、また、その起点も1つの明確な点となった。すなわち、ハリウッ드의描くローマ像は、ナチス・ドイツの衣を纏わされるようになったのである。そのことを示す作品として、*Quo Vadis*、*Ben-Hur*、*Spartacus*などいくつかその名が挙げられているが、ここでは特に*Quo Vadis*についての議論を紹介しておこう。それが最も顕著にローマ像のシフトを示した作品だからである。

この作品を通して、そのセリフの中にも、あるいは映し出されるシーンにも、ナチス・ドイツとのアナロジーが見て取れるという。冗長にならないよう、それぞれ1点ずつ指摘するにとどめよう。

まずは、作品中のセリフについて。主人公のウィニキウスはキリスト教を自らの信仰とするまで、その言葉の端々にファシストの薫りを漂わせている。戦中にそのような言葉遣いをよく耳にした観客にとっては、それを自然に感じ取ったであろう。もちろん、H. Sienkiewiczによる原作の中に、そのような雰囲気はまったくない。作中人物のセリフを巧みに変えることで、ローマの「文明化」の使命を、他の民族を力によって支配しその思想を押し付ける支配者民族Herrenvolkのそれとして、観客の前に提示したのである。次に、ナチスへのアナロジーを見せるシーンの最もたるものについて、触れよう。それは、ウィニキウスの凱旋式の場面である。その行進は、フォルムを通して、ネロの御前へと進む。もちろん、これは映画版での創作であり、H. Sienkiewiczの原作には、ない。また、帝政期の実情を考えると、ウィニキウスのような身分の人間が、凱旋式を挙げるなどということは不可能なことである。したがって、この場面の描き方には、映画版制作者たちの特別な意味づけがあると見てよいだろう。ここで、観客の目を引くのは、凱旋式に集まったおびただしい数の群衆である。これらの場面に観客は、ニュース映画やドキュメンタリー映像で観たファシスト国家の集会や行進の様子を重ね合わせたことは想像に難くない。ナチスの党大会の様子をおさめたL. Riefenstahlによる*Triumph des Willens* (1934; *Triumph of the Will*, 1935) の映像を並べてみれば、そのことに納得がいく。

これらのアナロジーが、特別ナチス・ドイツに向けられたものではなく、ファシスト国家全体に向けられたものではないか、との見方に対し、この論文の筆者はさらなる証拠を提示する。ここでは詳述できなかった点だが、アメリカによる対ナチスの民衆向けプロパガンダとの類似や、鷺のシンボル（ローマ、ナチス：翼を閉じた鷺⇔アメリカ：翼を広げた鷺）などからも、ローマにナチス・ドイツの似姿を背負わせようという意図は明らかである、と主張するのである。

帝政ローマとナチス・ドイツとのアナロジーは、*The Fall of the Roman Empire* (1964) になると見られなくなる。*Quo Vadis*で描かれる凱旋式と*The Fall of the Roman Empire*でのそれとをくらべてみると違いは決定的である。前者においては、観るものの目をとらえたのが参集した群衆の姿であったのに対して、後者では、永遠の都ローマの圧倒的な美しさが迫ってくる。このような中では手を掲げて敬礼する姿もファシストを想起させるものと

は映らない。とすれば、ハリウッドではローマとナチスとの間のアナロジーが、60年代の半ばに役割を終え、姿を消したことになる。この論文では、そのアナロジーを指摘するところまでにとどまっていたが、役割を終えたことがどのような意味を持つのかという問題は非常に興味深い。それは単純に世界が冷戦構造に移行したことが原因であるのか、あるいはそれだけではない何かがあるのか。さらなる考究が待たれよう。

3. 西洋古代史と映画

書物の内容を紹介することを中心ここまで進めてきたが、最後に、本書に対する感想、そして映画と西洋古代史の関わりについて、その問題点や、さらに考察を進めるためのいくつかのポイントを記していきたい。

各論文を通してやはり最も強く感じ取られることは、古代において、現実として存在した（と歴史研究の結果考えられている）ローマ、それそのものがローマとしてあり続けることはできないということである。このことは、各人の拠って立つ時代、社会、地位などに応じて、過去はその姿をさまざまに変えるものであるから、当然のことかもしれない。また、古代は、そのような可変性が大きいとも言える。古代史研究者として取り組むべきことは、なるべく客観的であろうとする歴史研究によってえられたローマ像（これ自体、1つの表象かもしれないが）と、他のさまざまなローマ像—すなわち表象された「ローマ」—との異同を正すことではなく、その異同を生み出した背景を探ることにある。

今回取り上げた論文集においては、ある意味、映画がテキストとして分析の対象となっていたように思われる。多くは、そこにこだわった読みを展開していた。しかしながら、観客がいなければ、それは映画ではない。その映画が、いかに受容されたか、そちらもまた考察の対象とされなければならないだろう。今年公開された*Alexander*は、アメリカでの興行成績が振るわなかったという。この理由を、同性愛描写を嫌った、宗教右派的な心情の表れに求める映画評もあった。事の当否は措くにしても、観客の反応も含めてはじめて、分析対象としての映画は成り立つのではないだろうか。もちろん、映画そのものの出来不出来が、受容のされ方を決める最大の要因であろうし、また短絡的にローマの表象のありかを探っていくと、例えばAとBのアナロジーの存在を指摘したところが、実はCというその間に存在したものを見過ごしてしまうことになるという危険性もある。また、映画の持つ特性上、セクシュアリティに関わるようなシーンが多くなるが、勢い分析の際にもそこに目が行きがちになることにも注意を払わなければならない。しかしながら、そのような難しさを抱えながらも、やはり、分析対象としての魅力が陰ることはないのである。

ローマ、あるいは古代世界を直接に描いた映画がある一方で、そうではない作品の中にもローマの姿を認めることがある。冒頭で述べたように、一連の*Star Wars*作品にもそれは当てはまる。このような中にあらわれる「ローマ」も、考察の射程におさめていかなけれ

ばならないだろう。また、*Troy* (2004) や *Alexander* といった作品はあるものの、ギリシア世界そのもの、例えばアテナイやスパルタが素材として描かれないのは、なぜだろうか、という疑問も残る。そこでは、現代の映画産業が考えるようなヒーローを設定しにくいのであろうか。アテナイに限って言えば、民主政の世界には映画制作者たちの関心が向かないのであろうか。そして、より大きな問題として、アメリカとイギリスを軸に考察した本書を前にして、日本の側から見る意義はどこにあるのであろうかという点もある。さらに考えを進めるきっかけはいくつかありそうだが、もはや紙幅が残されていない。これらは、別の機会に考察してみたいと思う。

さて、このフォーラムは「歴史の交差路」と銘打ったものであったわけであるが、これについて最後に触れて、拙文をとじることとしよう。もちろん、この言葉の直接的に意味するところは、「現代」、「古代」、「表象（映画）」という3本の道が交わる場所に、古代史研究者として、考察すべき問題が潜んでいるのではないか、ということである。交差路、もうお気づきのことと思うが、すなわち、triviaである。今ではすっかり、「ムダ知識」（そもそもムダ知識という言葉は自家撞着に陥っているような気がするのではあるが）を意味するものとして知られるこの言葉は、ローマ世界のあちらこちらで見られた、交差路のことであった。そこでは、行き交う人々が足を止め、他愛もない世間話や、まことしやかに語られる噂話に興じる場であったことであろう。あるものは、つい最近の都市参事会決議について、さながらそこがフォーラムであるかのように、口角沫を飛ばして議論していたかもしれないし、またあるものは、次に催される見世物の内容をあれこれと期待を込めて予想していたかもしれない。そう、そこは、人々の生活にとって非常に重要な情報発信・交換の場だったのである。このフォーラムのタイトルは、そのような場として、このフォーラムもまた機能してほしいという願いが込められたものなのである。「古代」という一本道ではなく、複数の道が交差するところに、考察すべき問題の1つを見つけ出し、そしてそこから、広く情報を発信し、また、交換の場を提供する。そうすることによって、いささか大仰ではあるが、とにかくその存立する意義を問われやすい西洋古代史研究の、レゾン・デートルの1つを見出すことが可能なのではないかという思いもある。もちろん、「古代」という一本道を一步一步、踏みしめて歩くことを否定するものではない。むしろ、そうして作られた道が、また新たな交差路に行き当たるという有機的な連関をこそ、望んでいる。

このような意味を込めたにもかかわらず、拙文がその目的を満たしているとはいいがたいことは十分に承知している。だがしかし、都合のよいことを言えば、物事はそれを始めたことによって、その半分の完成させたことになるという。ゆえに、このフォーラムが目指すところの少なくとも半分の拙文は満たしている、ということで諒とされたい。

註

* このフォーラムは、2005年3月の西洋古代史研究会第4回例会（於：京都大学）での報告を基にしている。ほぼ当日の発表のままとしているが、当日参加者からいただいたご意見、ご感想を参考にして書き改めた箇所も少なくない。ここに記して、感謝の意を表したい。

1) 原文は次の通り。本書で引用されているものに従った。なお、本文は拙訳であり、日本語字幕、吹き替え等とは必ずしも一致しない。（註2も同様）

“There, boy, is Rome—there is the might, majesty, the terror of Rome. There is the power that bestrides the known world like a colossus. No man can withstand Rome, no nation can withstand her—how much less a boy?…There’s only one way to deal with Rome, Antoninus: you must serve her, you must abase yourself before her, you must grovel at her feet, you must—love her. Isn’t that so, Antoninus?”

2) “The deed was not Messala’s. I knew him well, before the cruelty of Rome spread in his blood. Rome destroyed Messala.”